

牛泥棒とノーラの舞 — マレー半島中部の内陸社会

黒 田 景 子

「牛泥棒もできず、ノーラの舞をおどることもできない男に娘を嫁にやるわけにはいかない。いったいどうやって妻をやしなっていくのか」

— ラーマ6世王南部タイ諸国行幸記録 ラタナコーシン暦128年（1909）より

トラン地方の伝統についてのPhraya Ratsadanupradit（Kho Chimbi Na Ranong）の報告 —

はじめに

19世紀の後半から20世紀の前半にかけて、マレー半島中部の内陸世界では、多くの盗賊が村々や町を蹂躪し、農民を悩ませた。これらの盗賊は一般的な牛泥棒や強盗に分類される者と、村の治安を守る自衛組織として認識され、村の人たちから尊敬され、リーダーシップを賞賛される者があった。南部タイのソクラー湖（Thaleesap Songkhla）沿岸の稲作民社会においては、牛泥棒ができる能力とノーラ（Nora）の舞ができる能力が一人前の男としての資質と判断される言説が残っている。

一方1909年以降英領マラヤに属することになったクダー（Kedah）でも内陸の森に潜んでいる盗賊が多く知られ、恐れられていた。一部の盗賊については、ロマンチックな脚色物語が流布し、民衆の英雄とも言われて賞賛された。現在でもそのイメージを支持する人たちもいる。

本稿では、史料の少ないこの地域に関する近年の研究の成果をふまえ、恐れられつつ英雄視された盗賊とそれを巡る文化について、先行研究とは異なる視点から再考してみたい。

1 ソクラー湖沿岸域の盗賊社会 1894-1922

1-1 パタルン（Phatthalung）農民の自給自足社会

19世紀後半から20世紀前半にかけての、シャムのソクラー湖流域の農民社会は、盗賊が跋扈する地域として知られていた。背景にあるのはこの地域の地理的条件、19世紀後半の変化する地方経済状況、その結果シャムの地方統治再編や徴税システムの移行過程で生じた中央の制度の意図と村落側の解釈のすれ違いである。

ソクラー湖は現在のパタルン県とソクラー（Songkhla）県の東海岸部に囲まれたタイ最大の湖で、ソクラー深海港に開いた海水部分の南部から、パタルン中央部、さらに北部の汽水地域からなる。ソクラー湖西部の小河川の流域には19世紀前半以前は稲作農民村落群が存在している。半島の陸路を横断して西海岸のトラン（Trang）やサトゥーン（Satun）の盗賊がパタルンの町を襲っていた。

農村の稲作はもともと自給的生産品であったが、19世紀後半以降、半島東岸の主要港市ソクラーから余剰米が輸出されるようになり、湖の南部においては沿岸の交易都市へのアクセスルートと近

しいこともあり、米の仲介をする華人商人が入り込むようになった。従来は伝統的支配層である地方国主とその下部の役人が村落と領主を結んでいたが、地域統治再編により、地方国主の後任として首都から派遣された役人を村人は信頼していなかった。中央からきた役人はこの地域をよく把握しておらず、地元にはトラブルの元を持ち込んだからである。

湖東岸のサティンプラ (Sathing Phra) 半島では米作は行われておらず、むしろ海上からの海賊の襲撃に悩まされていた。この地域の他の特徴としては内海西岸と南部は仏教徒とムスリムの村落が点在する混住地域で、仏教とイスラームの境界域である。17世紀以来、中部のパタルンとソングラーにはジャワから来たムスリム国主が拠点を作り、そのムスリムの一族が地方の名家となって力を持っていた。

ソングラー湖沿岸の北部と中部は部外者の入らない孤立的地域であり、村落は自給自足的であった。ナコンシータマラート (Nakhon Si Thammarat) への陸路がある北部のクアングレン (Kuang Kheng) は森と沼沢地で三つの「くにざかい」に囲まれ、外界から切り離された状態にあり、盗賊団が潜む場所となっていた。

稲作農民にとっての財産は農耕につかう水牛である。水牛が病気などで死ぬと生きていくための死活問題となる。その場合はどこから水牛を調達してこなければならない。かくして牛泥棒が頻繁に行われた。

村はまた自然環境に起因する病気や動物の脅威にもさらされている。マラリアや毒蛇、象、虎、クマ、ワニなどとの遭遇からも身を守らねばならない。村は結束してこれらの脅威にも立ち向かわねばならなかった。自給自足的な村の人々の自助は、親族や村間の濃厚な関係で成り立っており、村の自衛は村自身に依らねばならなかった。

村の結束を強め、病気や災いから身をまもるためには、ハーブや呪術による医療行為が行われた。また、後述するノーラの舞や先祖の祭りドゥアン・シップ (Duan Sip) などの祭りが行われた。これらの呪術的慣習は仏教というよりは、仏教の中に取り込まれたバラモン文化、シヴァ信仰などに起因している。

1-2 1894年-1922年のソングラー湖流域社会の社会経済的状况

シャムは19世紀後半に西欧技術の導入とともに、西欧の圧力に対抗するためにも近代地理学概念による境界認識、地方統治制度の再編を必要とした。ラーマ5世は、世襲的にこの地域を押さえ交易や徴用労働から利権を得ている地方国主の利権を王室に集中させる財政的な必要があった。しかし、シャムの伝統的な支配システムでは中央と地方の関係は分節的で、中央は遠方の地方の状況については殆ど把握していなかった。地方統治再編では、利権をもつ地方国主の抵抗で改革に時間を要した。そこでまずは、沿岸の港市を根拠地とする世襲的地方国主の一族を、国主の世代交代時に新役職へ漸次異動配置換えして中央の役職につけ、ある程度の財産権を保障した上で、中央からの役人による統治へ置き換えていったのだが、その過程は困難を極めた。

ラーマ5世はチャクリー改革では1873年の税制改革で国家歳入室に税収を集権化した。また国事協議会と枢密院を作り、有力地方国主はそこに異動させ、中央からの役人と交代させた。また、奴隷制度を廃止して、寺や領主の私民となっていた労働人口を国家の所管に取り戻そうとした。シャ

ムの奴隷は人口の3分の1から4分の1になっており国家奉仕を大幅に免除された貴族や寺院の保護民となっていた。奴隷制度の廃止は、1880年以降に生まれた者から適用され奴隷身分から解放されたが、それはまた別の問題を生んだ[永井 1996]。

農民の側からすれば、以上の「制度改革」は

- 1) 従来物納税 (Suai, Aakon) で現物や徴用労働で納めていた税を国に金として納めなければならない。
- 2) 農村を郡と直接に繋ぐ存在が無くなる。政府から派遣される役人は伝統的村落が推薦する村のリーダーと二重に存在した。村のリーダーは従来からの有力な村の家系であり、政府役人が意図する統治イメージは村には理解されていなかった。
- 3) 奴隷身分が廃止された結果、地方の市長や知事にとってはいままで使用した労働人口が不足した。その結果として犯罪者を捕らえて裁判にかけて刑務所に収監し、刑務所を運営する市や知事が囚人への国からの手当金を得ることで収入を増やし、囚人を徴用労働力として自由に使役する例が増えた。国への税金を払えない村落民は逮捕収監されて囚人労働力として働かされた。

そもそも村落では中央から派遣される役人や沿岸からやってくる商人を「王族の人々」「都市の人々」と呼んで、村からは遠い存在とみていた。彼ら中央派遣の役人にとって地域は「マレー系朝貢国以外ではもっとも遠い地域」である。パタルンのソクラー湖沿岸の公的記録も多くはなく正確なものとも言えない。

19世紀後半からの沿岸都市の交易量と商用船の技術革新による商品輸送の速度の促進は、外部からの商人、主に華人商人の来訪を盛んにし、都市では賭け事などが流行し、村の公的な管轄圏はしばしば境界が変更され、徴税や徴用による負担は却って増えた。沿岸港市と農村部の経済格差は加速した。Nithi Eeosiwong は1894年以降に外部者が増えたことで、一層村の集団の自衛が固まった面もある、と分析している[Nithi Eeosiwong 2000; 10]。

「税の支払い」ができない村人はしばしば困窮すると管轄圏外の地域に移住、逃亡した。知事や市長は逃亡した村人を一括して「犯罪者」として追跡逮捕し、収監して裁判にかけて市の管轄する刑務所に送った。「囚人の徴用労働」に使えるからである。市長や知事にとっては、刑務所を数多く運営していることは自らの地位を安定させることであった。

1-3 村落の自衛と盗賊集団

沿岸の交易港市とは異なり、村落間の移動手段は小規模である。大船による輸送は海外交易とかかわる華人系商人のもので、湖の人々の輸送ネットワークは狭い。村落間の輸送はソクラー湖に流れ込む小河川上流と下流の産品の物々交換でなりたっており、近くの村落と連絡をとるためのものである。他の村からの盗賊の害を解決する手段としても、盗賊行為は自衛として不可欠と考えられていた。

医療においても村は遠方の外部に頼ることはできなかった。伝統的なハーブや呪術を用いたもの、呪術医 (Moh, Moh Phi: タイ語) による治療が主であった。呪術医の招聘やそのために村民が協力することは村の結束を確認し、高めるものとして機能する。この呪術の招聘や霊の崇拝とは、古い仏教伝統をもつサティンプラの寺院とバラモン教の影響を受けた「地方文化」でもある。儀式に参

加するのは一族の交流でもある。同じ呪術医を通して村人はつながる。ノーラの舞やそこで行われる呪術、あるいは先祖を祭るドゥアン・シップの祭り、仏教寺院への寄進は村々の交流の場である。

情報交換の場であるとともに共有する精神世界があり、ノーラの師の子孫であること、ノーラの一族に連なることは村人に喜びを与えていた。

一方、地域の盗賊には2種類あると認識される。村の財産を奪い、強盗、殺人を行う一般的な盗賊の他に「Cong Watthatham」（文化盗賊）と認識される盗賊集団がある [Mana 2003:54]。

この盗賊集団は「義賊」であり、自分の仲間と親族とその財産を守り、女子どもは殺めないという掟があった。彼らは盗賊行為によって得たものを持ち帰って村民に分け合った。自分たちの縄張りの外に遠征し農繁期に必要な水牛を盗んだ。「パタルンの盗賊」はしばしば、西海岸部のトランやサトゥーンの村を襲った。こういう義賊集団は、村の自衛組織でもあり、農民たちの支持を得ていた。いわば村ごと「盗賊集団」だったのである。

Suthiwong Phongphaiboonによれば「文化泥棒」の掟とは以下の条件をみたした場合をいう

- 1 名誉と尊厳を示すこと。
- 2 賢くあること。人に弱さを見せてはならない。
- 3 恩人を裏切ってはいけない。魔除けを他人に見せてはならない。
- 4 殺してはならない。女性や子どもは守る。
- 5 その任にふさわしい人物であることを示す。行事や守るべき「一族」が多く、支持されていること。
- 6 お互いの勇気を証明するための余興に参加してこれを誇示すること。

[Suthiwong Phongphaiboon 1999: 3673-3676]

葬儀におけるタイの慣習で記念として配られる「葬式本（Nangsuu Cek）」には故人がかつて「義賊、文化泥棒」であったことを誇る履歴まで記載される。

この「文化泥棒」は不利益におかれている友人を助け、援助する存在である。彼らは地元精通していて、盗賊の手段もよく知っている。その存在はソクラー湖河畔の人々に受け入れられた存在である。

だが、盗みや殺人は仏教的規範ではあってはならない罪のはずである。これをどのように考えればいいのか。

1-4 ドンサイ (Ban Don Sai) の盗賊団

ソクラー湖沿岸流域北部のクアン・カヌン (Khuan Khanun) 地区はナコンシータマラート、ソクラー、パタルンの三つの県境が接する湿地帯で盗賊が潜みやすい地理条件にあった。

この地域で有名なのは「ドンサイ盗賊団」で、1917年頃には、ルン・ドンサイ (Rung Don Sai) を頭とする盗賊コミュニティは、他県からも多くが参加し約70名の集団となった。

このグループが生まれたきっかけは、王室後援税 (Ratchachupkan税：当地では4バーツ税) の徴収である。従来の徴用よりは低いとされたが、農民にとっては大きな負担であり、それだけあれば多くの水牛を買うことができる金額である。多くの農民が逃亡し、盗賊団に加わった。そしてドンサイの盗賊集団は当局への税金の支払いを拒否すると宣言した。これは国に対する明確な反逆とさ

れた。

ドンサイ盗賊団のリーダーのルン・ドンサイが病の床につき、通報者によって当局が逮捕し、死亡すると、次のリーダーのフアダム・プレー（Hua dam Prae）が密告者に復讐して殺害したため、ソンクラ湖の人々は彼らを非常に恐れた。

この地域の盗賊は寺に伝わる出陣の呪術儀式をおこなってから盗賊に出かけたが、ドンサイ盗賊団は呪術で有名な寺院ワット・カオオー（Wat Khao Oor）の息子たち（弟子）と言われていた。「ドンサイ盗賊団」には「徳（bun）の高い泥棒」と言う評判があった。Manaの聞き取り調査によれば、「徳の高い、美德や道徳をまもる盗賊でないと、自分の呪文で治療することができない」からであり、呪術による守りが「在家仏教徒の積徳」と同一視されているのである。

このワット・カオオー寺院とは、古代にインドからこの地域に來訪したバラモン僧の修業場と言われる洞窟のある寺院で、バラモン教に由来する儀式や呪術、医術などが伝わっている。バラモンの呪術はナコンシータマラートやパタルンに広まり、17世紀に仏教寺院として建てなおされたのちも呪術の中心として知られ、伝統医術、戦いに臨む際の呪術、身につけると「不死身」となると言われるお守り（phra khruang）が民衆に広まった[Suthiwong 1999: 854-857]。

1-5 村人の「盗賊」イメージ

村人にとって盗賊とは何者なのか。村人は盗賊を恐れてはいるが、「道徳的な盗賊」は村の自衛のために必要な存在であり、「正義を行わず」当てにならない地方行政の役人よりも、リーダーとして望ましかった。こういう盗賊は村人の面倒をみて、農耕用の牛もない村には遠くから牛を盗んできてくれる。食べ物ももってきてくれる。それで、泥棒は村の守護者として人気があり、歌謡曲にも「もてる」男として表現される。「結婚するには、花婿はギャングでなければならない」とまでいわれる。

「盗賊行為は悪いことではあるが、違法と政府から言われても、村には迷惑をかけておらず、密売人と盗人、同じ人間だ。共に生計を立て、継続せず、殺さない。お互いに怒らない。」[Mana 2003 :163]

また、「道徳的」盗賊は、「道徳的な強盗のために抵抗される以外は一人で殺したり奪ったりしない、怒って憎み合ったり、触れられただけで女性を傷つけない、僧侶を傷つけない、ヤクザな性格で、気前がよく、法律よりも食べ物を愛している」と認識され、容認される。

これらの盗賊は怪我をしたりつかまらないうちのお守り、呪術的能力、呪文をよくすると考えられていた。盗賊に出かける前には、寺で行われる儀式を模倣して、家の霊に許しを請うてから行った。また、盗賊をつかまえる側もまた対抗できる呪術を行う必要があったとも言われた [Mana 2003 :174]。「徳が高い」ということは、呪術の効果をよく発揮できる人物という意味でもあった。

「反政府組織」とみなされたドンサイ盗賊団に対して警察は鎮圧隊を結成して越境強盗団に対処する麻薬を利用した作戦をたてたが効果がなく、その後鎮圧隊は管轄圏を越えた情報の共有と協力をすることによって盗賊団を壊滅に追い込み、討伐したが現在も同様の「ギャング団」は存在するといわれる。

社会経済的な要因からみれば、ソンクラ湖沿岸流域の盗賊社会はシャムの中央集権化の急激な

変化に対応できない内陸の村民のシステムへの反発が背景にある。徴税を逃れる農民や盗賊たちは警察の管轄圏外に「越境」を繰り返したのである。

だが、一部の「文化的盗賊」を支持する農民たちは、彼らに恐れをいだくとともに、彼らの強さを呪術的な強さとし、それを在家仏教的解釈では「徳がある」と言い換え、この社会における「呪術的能力」に裏付けられた人物を重視する価値観が伺える。

ソンクラー湖沿岸域の例では、仏教寺院とその社会に紐付けられた社会が主として報告されているが、ではこの地域から移住したタイ語話者のムスリムやシャム人仏教徒の村落があるクダーではどうだろうか。

2 クダーの盗賊集団

2-1 国境設定と英領マラヤの支配

シャムと英領マラヤの近代国境は1909年の英＝シャム条約によって、原型が確定した。すでにペナンとウェルズレイ地方を獲得していた英国は1911年にクダーとプルリスの人口調査を行った。

そのセンサスは、詳細なもので、クダーの人々の民族を規定分類し、宗教、日常使用言語、出身地、職業などを記載した。その結果、1911年のクダーはマレー人195411人、華人33746人の他、シャム人8135人、インド人6074人からなることがわかったが、マレー人の中の更なる民族分類としてサムサム（Samsam）が14747名存在している。宗教や言語調査から、ここにいるサムサムとはタイ語話者ムスリムであり、同じくタイ語話者であるシャム人仏教徒と共に、クダーの内陸山間の湿地流域に住む、稲作農民であることがわかった。彼らタイ語話者（正確にはタイ語の南部方言の一種であり、マレーシアではシャム語と呼ぶ）は、数百年前から19世紀末にかけて南タイのナコンシータマラート、パタルン方面からクダーに南下して住み着いた、戦乱避難民、あるいは自主開拓農民であることがわかっている[黒田 2019-a]。

初期からのクダーのマレー語話者マレー人農民村落は主として西海岸沿岸部の幅20kmの低湿地の稲作地域に分布し、クダーにおいても米は輸出品目ではなかった。19世紀の半ば以降、スルタンと大臣による沿岸の運河が開削されて米の生産が増加し、その後華人商人が、集めた米や錫がペナンを経由してインド洋方面に輸出されるようになった。錫はクダー南部のバリン（Baling）の鉱山の他タラン（プーケット）やラノン（Ranong）から集められている。ペナンからはアヘンが供給され、それが19世紀前半にはシャムのナコンシータマラートやソンクラーなどの有力地方国主を引きつけ、クダーは1821-1842年までナコンシータマラートの仏教徒国主に占領された。ペナンの英国東インド会社はその事態をうけてシャムと交渉を開始し、それがシャムにとって近代西欧勢力との接触と1855年のボウリング条約締結に至る流れを生んだ[黒田 2019-b, 2020-b]。

2-2 クダーの農民強盗とその背景

Cheah Boon Khengは、1909年から1929年にかけての「農民強盗」について、英領マラヤの公文書と犯罪記録、さらに聞き取り調査を手がかりとしてクダー内陸の義賊とその社会について分析した。

まず、19世紀末のクダーはソンクラー湖畔流域と同じく、犯罪の多発地域と認識されていた。Cheahの分析によれば、クダーの北部の殆どが「盗賊の活動域」である。

ウェルズリー州（Seberang Perai）の英国人土地所有者のローガン（Logan）は州境の犯罪の多さを報告している。それによれば、1880年代のクダーの南部では、鉦山町クリム（Kulim）の周辺で華人の秘密結社の活動が活発になり、売春宿、アヘン窟、賭博場などが開かれていた。一方クダー北部は警察が少なく無法状態であるとし、特に、シャム語（タイ語）を日常語としている「愚かで無知な」サムサムの居住地域での危険と牛泥棒の多発を指摘している[Cheah 1988:16]。

Cheahはホブズボウムの『The Bandits』に上げられた「貧しい農民、持たざる者が、生存のために、あるいは富の再分配の手段として富裕者から奪う「自助」としての非公式な社会システム」として北部クダーの強盗団を理解しようとした。それはまた、ジェームズ・スコット（James Scott）の『Weapons of the Weak』（弱者の武器）で述べられた例のように、クダー州のある村での盗みや窃盗が、貧しいマレー系農民が苦難や地主、村や政府当局に対して日常的に闘う際の武器の一部を形成していることを示す行為と似た構造を持つとした。ソクラー湖沿岸の盗賊社会について書いたManaはクダーと地理的条件が異なるとしたが、視点を変えてみるとこの内陸の農民地域が置かれた時代的状況は驚くほど似通った面を持っている。

1909年の英領マラヤとシャムの国境設定以前の1906-1908年のクダーの年次報告書では牛泥棒は「北部クダーの主要産業であり、地域首長のブンフル（penghulu）のナイ・シム（Nai Sim）が指導していた」と記述する。このナイ・シムとはクダー北部のクバンパスのタイ語話者ムスリムのサムサム村落エリアで良く知られた人物で、ソクラーとアロースターを結ぶサイブリー道路沿いに勢力を有していた。

地域首長ブンフルは英国の支配に必ずしも協力的とは限らなかった。他の報告書でもソクラー側のシャム人（仏教徒）村長やクダーのタイ語話者地域のムスリム村落の首長の双方が犯罪行為に対してあいまいな態度をとり続けていることが報告されている[Cheah 1988: 22]。これらの地域首長が犯罪撲滅に積極的でない理由として報告書では、もともと地域首長ブンフルには給料が支払われない代わりに地代や地租の支払いが免除されていたこと、また農民を徴用する権利を有していたことを上げている。1909年にクダーが英領マラヤに組み込まれると徴用が廃止されたが、今度は英国に地租と地代を支払う負担が生じた。このことは却って農民の生活を苦しめ、自助のための「伝統的な盗賊行為」が増加したとする。

英国人官吏によれば、クダーの強盗集団のほとんどはマレー人かサムサムであり、警察当局は彼らを「危険な犯罪者」として糾弾し、なんとか逮捕、排除しようとした。一方、民衆の認識では、これらの「無法者」は「英雄」や「善良な盗賊」であり、地域の伝説となって今も名前を知られている。1940年代の子どもの遊び歌にはサレー・トゥイ（Salleh Tui）、アワン・ポー（Awang Poh）、ナヤン（Nayan）、地方ボスのスライマン・クレカウ（Sulaiman Kerekau）といった当時の大物「ヒーロー」の名前が登場する[Cheah 1988: 17]。

彼らは盗賊や誘拐を繰り返したが、警察につかまることがなく、そのカリスマ性、闘争能力から「不死身」とまで言われ、人々から恐れられ、あるいは尊敬された。州政府は情報に報奨金をだした。そのことがかれらを無法者として有名にしていった。彼らは有力な地方首長、ブンフルをパトロンとしていた。ブンフルは彼ら「強い男」を家来、子分としてもつことで、自らの権力・権威をも誇

示していた。ブンフルたちは保護と庇護の見返りとして彼らからの貢ぎ物をうけとっていた[Cheah 1988:18]。

ブンフルたちは当時売買が増加していた牛の取引に際して必要な免許登録の発行権限をもっており、盗賊と組んで不正行為に手を染めていた。その後、登録が獣医局に移管され、その数は減じたものの、今度は1920年に牛の病気が発生し農民が牛を失い、耕作に影響がでて窮状に陥ると、牛泥棒は一層の利益を生み、盗賊はシャム国境をこえて牛を運んだ。

クダーにおける農村犯罪は一時的に留守にしている地元住民の土地に侵入し、道具、植木の杭、柵の柱、布切れ、家禽、家畜などを奪うという形で行われることが多い。盗賊は盗んだ家畜は売るか早々に食べてしまうかあるいは身代金を要求した。農民は警察の捜査とその後の裁判が非効率的であるために、身代金を支払い、牛を取り返す方を選ぶか、あるいは諦めた。

Cheahは彼らの活動時期は世界的な経済不況の時期と一致していると指摘し、これらの盗賊の出現には経済的要因が大きく影響していると分析している。したがって、無法者のナヤン（1914～20年）やアワン・ポー（1915～22年）の出現には経済的要因が大きく影響していると考えられるし、無法者のサレー・トゥイを生み出したのも、それ以前の1907～8年の大恐慌が原因である可能性が高いとする[Cheah 1988:51]。

これらの盗賊団の活動する地域は、ブンダン（Pendang）地区、パダン・トラップ（Padang Terap）地区、クバンパス（Kubang Pasu）地区のような孤立した内陸の地域である。また、彼らの活動域はクダーの広範囲にわたるが、サムサムやシャム人といったタイ語話者の居住エリアでもあり、Cheahはそこのサムサム住民からの聞き取りを多く得ている。Cheahはサムサムの起源や分布について一連の説を紹介したものの、それ以上サムサムの問題については踏み込むことを避けたように見える。

以下に著名な「盗賊」として知られる若干の例をあげる。

- 1) サレー・トゥイ（Salleh Tui）の活動域はパダン・トラップとクバンパス地区で森の貧しい地域に集落がまばらに存在し「陸稲」栽培をしていたと言われる。この地域の住民は殆どがタイ語話者ムスリムのサムサムであり、シャム人仏教徒も少数存在した。

サレー・トゥイの名前は1906年の報告書では「Mat Salleh Etwee」と記され、サトゥーン（Satun, Setul）の出身であるために「(Se) Tuiのサレー」の通り名で知られる。（クダーマレー語の方言ではSetulはSetuiと発音される）サレー・トゥイは盗賊団のリーダーで、農村だけでなくランカウィー島周辺で海賊や、華人の賭場を襲った。予告して襲撃するなど大胆で、なお多くの殺人を犯したため地域には恐れられていた。1909年に彼は病気になり、報奨金を目当てに密告者が警察に報告し、急襲され射殺された。

彼が警察の手を逃れていたのは協力者がいて、隠れ家が特定できなかったことや、彼の「不死身」が知られ、特別な力があると人々に一種の英雄的な評判があったことにもよる。サレー・トゥイは戦利品をトラック村（kg.Tolak）の自分の村の人々に振る舞い、住民には良い評判を得ていた[Cheah 1988:54]。

- 2) アワン・ポー（Awang Poh）は同じくパダン・トラップで1915年頃から活動し、1922年に射殺

された盗賊で地元民はかれをサムサムと認識していた。サレー・トゥイと同じく「不死身の盗賊」として知られている。アワン・ポーの出身はトカイ (Tokai) のダト村 (Kg.Datuk) である。彼は盗賊ナヤンの親友でありそのNo.2として英雄視されていた[Cheah 1988:57]。

3) ナヤン (Nayan またはPanglima Nayan)

民衆に高い人気を誇るのはナヤン (Nayan) である。ナヤンはパダン・トラップ川の中流のパヤ・クルビ (Paya Kelubi) 生まれのムスリムである。ナヤンはプンダンのブキット・ペラ (Bkt. Perak) に隠れ家をもち、広く沿岸域まで活動した。ナヤンは1920年から活動し、1922年に射殺された。その死から2年のちにはナヤンについての民間でロマンチックな伝承が広まり、1938年には大衆劇団がバンサワンの「ナヤン隊長」(Penglina Nayan) という劇をクダー州都のアロースターで演じた。さらに1959年にはマンソール・アブドゥラ (Mansor Abdullah) がこれを小説として描き「マラヤのロビン・フッド」として評判が高い。ナヤンについては、女性を攫い、身代金を要求する脅威としての恐怖を語るものもいる一方で彼を「貧しい者の味方であり、貧乏人を苦しめる金持からしか盗まなかった」とナヤンを賞賛する認識もある。ナヤンを英雄として語る老人には筆者も出会ったことがあり、ナヤンは悪者ではないと強く主張していた。

ナヤンの物語は恋愛物語など含めてかなり脚色されているため、Cheahが聞き取りを含めて再調査したところ、ナヤンの活動の背景にスライマン・クレカウ (Sulaiman Kerekau) という地方の犯罪者組織の大ボスの存在を確認した。スライマン・クレカウは中央平原のグア・クパヤン (Gua Kepayang) に拠点をもつ他、各地に複数の「秘密結社」をもっていた。スライマンの一味の一員として頭角をあらわしてきたナヤンは、マレー人や華人の富裕層を襲い、牛だけでなく、金銀財宝、また娘や妻を誘拐して身代金を要求した。また、首長のブンフルが豊かと言われる地方も襲撃し、華人の賭博場を襲ったこともあった。ナヤンの広範囲な盗賊行為はスライマンによって可能であった。

スライマンは権力と影響力を争う地元エリートの一人であった。英国領となったクダーの統治に当たる新しい政府組織による苛烈な税金徴収システムへの転換で、領主や村長はそれまでの伝統的方法での徴用権を失ったが、まだ農民への影響力を失いたくないために従来のパトロン＝クライアント関係が続いており、1912年から1920年代にかけては地域の権力や影響力を巡って地区長や村長と争う、対立する地元のエリートの出現を顕している。

スライマンは地域の警察に賄賂を送り、地方で違法な闘牛、闘鶏、マヨンなどの踊りや、ワヤン (影絵芝居) などのイベントを主催し、賭博やアヘンの販売もまかない人々を集めた。こういう場に集まる農村の若者を勧誘して仲間とし、秘密結社組織を作って、対立するじゃまなブンフルをナヤンに襲わせ傷つけることができた[Cheah 1988:67]。

1920年の報告書によれば犯罪結社に脅迫された農民や警察は犯罪人逮捕に協力しなかった。地元の警察官自身がスライマンと彼が連れている「呪術師 (Bomoh)」の力を恐れ、賄賂を受け取って西欧人の上官の耳に入らないようにしていた。

ナヤンの出身地の人々はスライマンを知っており、必ずしも「英雄」ナヤンの像を支持しては居なかった。むしろ現地より遠い地域の人々が「民衆の英雄」としてのナヤンをイメージしていた。

北ケダのACPの1920年9月25日付のメモでは、パダン・プリアン（Pdg Peliang）とムキム・トゥロイ・キリ（Mukim Teloi kiri）の二人のブンフルが牛泥棒についての訴状の記録を拒否したこと、ナヤンはこれらの村長と頻繁に出会っていたと密告されていた。[Cheah 1988:72] これらのブンフルたちは秘密結社に参加しており、結社参加は恐喝の手段である。結社メンバーはコーランに宣誓する（*junjung Koran*）ことによって行われている。パダン・プリアンやムキム・トゥロイ・キリはクダーの内陸地で現在もシャム人仏教徒やタイ語話者ムスリムの村落が集中している地域である。

スライマンの庇護のもとでこそナヤンの活動は保障された。なので、ナヤンがスライマンとの関係を断って「独立」した盗賊団を持ったとき、スライマンはナヤンによって自らにも危険が及ぶと考え、ナヤンがシック（Sik）の森に潜伏していると部下を通じて警察に通報し、ナヤンは警察との闘争で命を落とした。

しかしながら、ナヤンの物語は農民層には「民衆の英雄」として捉えられた。ナヤン自身にそれを想起させるカリスマ性があったかも知れないが、民衆が求めたナヤンは「社会的経済的に困窮する農民が、自分たちの敵である富裕層や役人を襲い、懲らしめる我々の代表」としての姿であった。

2-3 呪術と盗賊

ManaとCheahの先行研究ではソクラー湖流域の盗賊集団とクダーの盗賊集団は、近代制度への移行期の混乱と、従来と異なる徴税方法による農民の困窮を背景として頻発したと分析する。孤立的な内陸の村落では外からの役人や英国人官吏への不信がある。また、盗賊を英雄視する要素として、ソクラー湖流域の自助自衛組織として「牛泥棒」は村の守り手であると認識され、クダーでは「義賊」のイメージが、社会的弱者の強者への抵抗の象徴として捉えられたとする。

ここで、黒田は民衆の支持する盗賊集団のカリスマ性を支えた要素について若干異なった視点から注目したい。

これらのカリスマ的盗賊には、ソクラー湖流域においても、クダーにおいても、「不死身」「不死身となる呪術の能力」があるという言説が付与されている。

ソクラー湖沿岸流域、バタルンの盗賊の「道徳的文化的盗賊」は「徳が高い盗賊」として、当地の在家の仏教の行為の中に位置づけられて理解されている。

クダーの場合には、犯罪集団でもある秘密結社ではクルアンの詠唱（ジュンジュンクルアーン）によって、イスラームの中に誓いが位置づけられている。恐れられる盗賊は呪術行為をよく行う、あるいは地方ボスは有名な呪術者（Bomoh）を雇っていると囁かれている。これらの「慣習的呪術行為」の効果でそれゆえに彼らは不死身である、とも言われた。この呪術的慣習とは仏教やイスラームの中に取り込まれた、古代のパラモン教の慣習である。

マレー半島中部にはこれらの慣習が色濃く残り、ソクラー湖沿岸流域から移住してきたサムサムとシャムというシャム語話者集団、あるいはシャムの影響を受けたとされるクダー等、かつてのシャムの朝貢国地域の住民たちである¹。呪術文化は現在でも異なった形で民衆文化に影響をもつ

¹ 深南部タイのパタニのマレームスリム社会においても呪術を使う例が見られる。2004年にパタニで再発したテロ事件のクル

ている。この地域を起源とするといわれる舞踊においても共通する特徴である。

ではクダーや南タイの独自文化としてそれぞれの国で紹介される舞踊群の持つ呪術要素とはどのようなものか。

3 ノーラの舞, マヨン (Makyung), メックムルン (Mek Melung)

本稿冒頭に揚げた「牛泥棒をすることができず、ノーラの舞を踊ることもできない男には娘を嫁にやれない。」とは1909年当時のこの地域で嫁とりをできる男の能力を象徴している。「牛泥棒ができること」は「妻を養うのに十分な能力な経済的能力」を顕している。では「ノーラの舞を踊れる」とは何を指しているのだろうか。

ノーラは南タイで人気のある古い伝統のある舞踊芸能の一つである²。南タイとマレーシア北部州には共通する伝統文化があり、その広がり、タイとマレーシアの国境の南北に広がり、現在も舞踊グループが互いに国境を越えて活動している。

これらの舞踊群の最初の担い手はモン人 (Mon)・クメール人 (Khuber) 人とマレー人であると言われる。上座仏教やイスラームより以前に到来したアニミズムやブラフマニズムの要素を持っている。タイとマレーシアの研究者によれば、これらの芸能の起源は800年1000年と遡ることも可能であるが歴史的な起源を遡るのには限界がある。

本章ではこれらの舞踊芸能のうち、南タイでソクラー湖流域に主な拠点があるとされるノーラ、パタニの宮廷舞踊とも言われるマヨン、クダー農村に原型のまま残るメックムルンの舞をとりあげたい。



Figure 1 ワット・タケーにおけるノーラの舞：鳥の踊り部分
(<https://www.youtube.com/watch?v=NoyWwqguZks&list=R DZLp2ALcBUdg&index=2> 2021/10/28参照)



Figure 2 マヨンの呪術的治療場面 (マインプトリ)
(<https://www.youtube.com/watch?v=NoyWwqguZks&list=RDZLp2ALcBUdg&index=2> 2021/10/28参照)

セモスクに籠城した参加者は、不死身になる呪文で自らを鍛え、聖水を撒くことで軍の戦車の侵入を阻止しようとした。[黒田 2012]

² 「ノーラ」とは、マノーラ (Manora) の別名であり、語源はパーリ語、サンスクリットの「nara」に由来する。(人間の意味ではあるが、Manusya (manuṣa) とは区別され、「戦場におもむく者」あるいは「戦闘を指揮する者」が原意で「男らしい者としての神々/至高神」をも兼ねる 女性形はnārī。

3-1 農民社会と芸能, その特徴

これらは米作農村における農民の生活から生まれたと考えられる。米作農民の生活のリズムを反映し、農村においては農閑期の結婚式や様々な宗教行事で演じられてきた。その後これらの農民芸能は地域の宮廷の宮廷演舞として演じられ、宮廷での洗練されたバージョンでも知られるようになった。宮廷では王家の楽しみや王の葬儀の際に演じられていた。

ノーラ、マヨン、メックムルンには、以下の共通する特徴がある。

- 1) 舞踊と呼ばれるが、上演する場合には呪術的儀式が行われ、踊り手は依頼に応じて、死者や先祖の霊を呼ぶシャーマンとなる。むしろその部分こそが上演で重要な意味を占める。
- 2) 舞踊の物語はナコンシータマラート³、パタルンの神話や民話がモチーフである。
- 3) 舞手の村落は、歴史的にタイ語話者の分布する地域である。クダーの場合はシャム人村落にノーラの演舞グループが複数ある。

クダーのワントップス (Wang Tepus) で継承されているメックムルンはマレームスリム村落ではあるが、独自性を保ったまま儀式も含め演じられている非常に珍しい存在である。この村落はナコンシータマラートやパタルンからの移住者であるタイ語話者ムスリム、サムサムのグループであったと考えられ、戦乱をさけて避難してきたタイ語話者のナコンシータマラートの王族の移住先コタムンクアン (Kota Mengkhuang) や、現在もタイ語で演じられるワヤン・クリット⁴の演者が存在するアソン (Asun) 村が近辺にあり、タイとの関係が濃厚な地域である。

3-2 ソンクラ湖沿岸のノーラ舞踊

タイで現在ノーラの継承者として有名なのは、パタルンのタケー村 (Tha Khae) である。13-15世紀のパタルン王族を祖先とするタイ仏教徒村落であり、ノーラ師 (Khru Nora) を受け継いでいる。ノーラの起源はサティンプラ (Sathing Phra) である。古い考古学遺跡からも知られるワット・パコー (Wat Phakoo) の南にあり、湖東岸のワット・タークラ (Wat Thakhura) と西側のワット・キアン・バンケオ (Wat Khian Bang Kaeo)、ワット・タケー (Wat Thakhae) の3カ所の寺院と村落が原点と信じられている。

ノーラ師は男性であるが、女性もまた加わる。南タイで主要な継承者であるタケーのノーラ舞踊団はワット・タケー寺院の敷地内にノーラ用の舞台を持ち、代々ここで演舞している。彼らの信仰の原型は先祖崇拜である。サティンプラに遡る先祖とその踊り手である12人のノーラ師が演者に憑依することが演舞には必須である。また、ノーラの伝説のなかには12人の妻を持っていたノーラ師がいて、彼の妻たちは、タイ、中国、ラオ、ビルマ、マレー系であり、上座仏教、大乘仏教、キリスト教、イスラム教の宗教を信仰していたとされる。最初の妻は上座仏教徒のMae Khaen Awn、最後の妻はMae Soi Dok Makで初期のアユタヤの支配者と婚約した中国人の王女とされる。また別の説では最後の妻-Mae Jamjuri Sijuraはイスラーム教徒であったとする。[Guelden 2019: 292]

ノーラの主たる公演はワット・タケー寺の敷地内での行事や市で儀式から始まる。僧侶は、儀式の前に読経し供応に預かるがその後は基本関与しない。演舞は憑依部分が重要である。人々は先祖

³ マレーではルゴール (Lugor) と呼ばれる。日本近世史料では「るごる」と表記される。

⁴ Wayang Kulit, タイではナンタルンNang Talungと呼ばれる。パタルンの皮芝居の意味である。

霊招来を要求して祈願成就や、病気治療で自ら憑依するためにノーラに参加する。その際憑依した女性を鎮めるための聖水を僧がかけるという場合はある。

国境地域にはノーラ・ケーク (Nora Kheak: イスラーム教徒のNora) と言われるムスリムによるものもあったが、これはマヨンの事かもしれない。だがムスリムが治療のためにノーラを訪れる場合もある。2016年の例では、ムスリム女性がノーラの先祖の「ムスリムの師」に憑依された。この場合、「ノーラのムスリムの先祖, Tok Adam, Sithnyaawaa, Himumii, Jan Jurn, Jan Sri Juraa [精霊]が、憑依して、「体の中のなにものか」によって自らの体をコントロールできなくなり」治療のためにノーラの儀式に加わったと説明する[Guelden 2018: 232]。

ノーラの演舞は自然霊やバラモン教の神々、そして個人的な祖先への敬意を示すためである。ノーラの祖先は、子孫の道徳を見守る番人としての役割を果たしている。規範や道徳に反すると、事故や病気、天災などの形で警告や罰が下る。儀式との関わりと憑依のために演舞の場を間違った形で変更をすると憑依状態で現れた霊から叱責され、演舞が失敗し、「罰」が下ると解釈される。タイのノーラにおいて人々が求めるのは先祖の憑依とそれによる癒しである。カリスマ的なノーラ師とその後継者によってノーラはタイの20世紀半ばの「西洋文明化」を強制した「ラッタニヨム愛国運動」の時代をも衣装を西洋風にするなどして乗り越えてきた。

ノーラ舞踊団はまた依頼を受けて、マレーシアに行くこともある。またマレーシアにもノーラ舞踊グループは複数存在し、クダーのコ・ディアン (Ko Diaeng), ナカ (Naka), ジトラ (Jitra), ペドゥ (Pedu) のシャム人仏教徒村落で演じられている[Ghulam-sarwar Yousof 1982: 53]。これらの村落は400年ほど前からの南タイからの内地移住農民村落である。「先祖の霊を下ろすことが巧み」な評判の高い術者には高い報酬が与えられ、農民の副収入としての呪術能力は重要である。

マレーシアにおいても、ノーラやマヨンの一部の呪術的部分であるマインプトリ (Main Putri) などもやはり報酬を得られるもので、現在非イスラーム的としてマレーシアで演じる機会がないクダーやクランタンのマヨンの踊り手はタイのパタニやヤラー (Yala) に出張して報酬を得ている。

そもそもクダーの農村では、結婚式の披露宴などでワヤンや舞踊を披露して副収入を得る慣習があった。クバンパスのタイ語話者ムスリム村落では地域でペルシャ起源といわれる舞踊のハドゥラ (Hadhrah) の舞踊グループがあって他の村落に招かれていた。

マレーシアにおいてこういう農民舞踊や芸能が演じられなくなったのを、ムスリム自身は「テレビや翌朝から子どもが学校に行くなどの生活の変化で、夜通し行われる踊りには参加出来なくなった」、あるいは「非イスラーム的な儀式や芸能は良くないことというので広く行うことはできなくなった」と述べる[黒田 1995]。

現在もマレーシアでイスラーム原理主義政党が厳しい規範を設けているクランタン州やクダーにおいては「非イスラーム」とみなした文化はほとんどが封印され「博物館行き」などと言われる。具体的には1970年のイスラーム革命の影響で、「より厳格なイスラーム実践」が都市から農村にかけて流行したことが色濃く影響している。

3-3 「イスラーム実践」の変化

ノーラやその他の舞踊が行われてきた地域で、「イスラームの実践」が重視されるようになった

のは、実はそれほど古い時代ではない。19世紀後半にパタニからメッカに留学したウラマー、シェイク・ダウド・アル・ファタニ（Sheikh Daud Al-Fatani）は多数の著作をアラビア語とパタニ・マレー語で書いた。それは一般民衆のイスラーム実践の教育のためである。この書物はその弟子たちによってメッカから東南アジアに持ち帰られ、各地のイスラーム学校で教本として一般化した。パタニでポノ、クダーでポンドックと呼ばれる寄宿型のイスラーム教育施設ではこれらの筆写本や後に印刷本が今も用いられ、20世紀前半にかけて民衆のイスラーム実践は深化した。パタニ・マレー語のジャウィー表記やアラビア語はこの教本の普及により広まったのである[黒田 2020-a]。

それ以前の19世紀前半までのマレー半島中部の庶民のイスラーム実践は、かなり緩いものであった。その史料としてある碑文の表記が例となる。1848年のソクラーとクダーを結ぶ交易路サイプリー道路の途中のサムロン橋の改修は地元の民のタイ人、華人、ムスリムらが資金提供したものだが、橋のたもとに建てられた3つの石碑の漢籍碑文、タイ語碑文、ジャウィー表記のマレー語碑文は異なった内容をもつ。特徴的として漢籍碑文は「道光年間」の記載で華人の暦に依っているが、タイ語碑文では仏暦をもちい、太陰暦の月の満ち欠けによる白分・黒分の暦で記されている。そしてジャウィー（Jawi）綴りのマレー語碑文はバラモンの十二支の暦法を用いる。「マレー商人や留學生の数が増えることへの期待」が記されているがいっさいのイスラーム的表現はみられない。碑文によれば、橋の完成を祝い、バラモン僧による儀式、仏教僧の読経と供応、参加者皆で共食を楽しんだことが述べられている。この状況から、当時の「イスラーム実践」ではイスラーム的な行為がその後におけるほど浸透していなかったことが伺える[黒田 2002]。

パタニ・マレー語による教育がムスリムのイスラーム実践を促したとすれば、日常にマレー語を使わないタイ語話者サムサムへのイスラーム教育の浸透にも差が生じたと考えられる。日常語がタイ語である、タイのソクラー湖流域とマレー半島西海岸においては、現在も「緩いイスラーム規範」がみられる場合がある。西井の報告のようにタイのサトゥーンにおける、仏教徒とムスリムの婚姻による仏教徒への改宗もその一端であろう[西井 2012]。

マレー語話者の「イスラーム実践」に目覚めたムスリムにとっては「真面目なムスリムとしての生き方」が重要な社会規範となった。「サムサム」とは沿岸のマレー語話者からみたタイ語話者ムスリムであり、いまだその実践が不十分である「不真面目なムスリム」として評価された。後にクダーにおける「サムサム」たちはその評判を嫌い、マレーシアの国教としてのイスラームを受け容れて「真面目なムスリム化」していく。一方でイスラームと直接関連づけられない日常言語（タイ語）や、「イスラーム化」によって許された「古い慣習（adat）」は残ったのである。

1970年のイスラーム革命によって全世界に流行したイスラーム原理主義の実践は一層厳しいイスラーム的規範を推奨し、イスラームを国教とするマレーシアでは、「非イスラーム的」儀式や行事、芸能は忌避され、公的に行うことは禁止されてきた。90年代のタイ語話者村落の調査においても「非イスラームなことはすでにやっていない」と村人たちは強調したが、バラモンの要素を含む一部の儀式、舞踊については私的に行われているのも事実である。黒田が1991年の調査中に経験したのは、「非イスラームなことはもうしない」と断言する家族が、呪術医（Bomoh: マレー語）を招いて病気治癒の儀式を複数おこなった場合である。儀式冒頭では参加者がクルアンを唱えて「イスラーム化」

し、ムスリムでもある術者の能力は「魂の強さ」で評価される。他の例としては、クダーにシャム人仏教徒である著名な呪術医（Bomoh）がおり、仏教寺院ワット・カライ（Wat Kalai）の近くに住む術者の家に、シャム人の他、クアラルンプールやペナンからの華人が訪れるとともに、近辺のマレー人ムスリムも訪れて術やお守りを求めている。「慣習（adat）」あるいは「儀式冒頭にクルアンの読み上げによるイスラーム化」することで個人的に許容されているのである。

4 文化と観光

現在、これらのバラモンの要素を持った芸能は、新たな試練を受けている。国家の観光政策として公的に認証をはかる動きである。

ノーラはシャムにおいて、これまでもスターを生み出し人気を有しているが、これを政治的に観光資源として利用とする動きとそれに反対し伝統を守ろうとする動きがノーラ師たちのなかでも揺れ動いている。

マレーシアにおいてはマヨンが問題になる。前述したようにマヨンにも呪術的部分がある。マヨンはパタニ王国の宮廷舞踊を起源とすると言われている。しかし舞踊としてはインドネシアにも広まっている。

マレーシアとインドネシアはマヨンのユネスコによる無形文化登録をめぐって競争していた。2005年に、この舞踊はマレーシア独自の無形文化遺産として登録が認められた。そのため、この舞踊を法的に演じるために、非イスラーム的要素を除いたバージョンを国立舞踊団が作成した。クアラルンプールでの上演の評判では、容認するものと容認しないものに別れた。またこの舞踊のマレーシアにおける継承者が多いクランタン州は、マレーシアの中でも特にイスラーム法を厳格に採用しており、非イスラーム的芸能の実施は厳しく禁止されてきた。現在州政府は「非イスラーム的要素を除いた上では上映を認めることもありえる」と言う立場をとっている。

マレーシアの国立伝統舞踊団は、その他クダー独特の舞踊であるメックムルンについても、呪術部分を含む原型をとどめている村の舞踊から、やはり呪術的要素を除いたバージョンを作って上演を試みている。

なお、本稿を校正中の2021年12月16日に南タイのノーラの舞はユネスコ無形文化遺産に登録された。より一層の観光資源化が進むと予想できる。

タイの場合もマレーシアの場合もこれらの舞踊の新しいバージョンは、結果として国家の観光振興政策と結びついた産物である。文化は一体誰のものなのであろうか。

おわりに

19世紀から20世紀の内陸部農村地域における盗賊行為は、治安維持のための自助組織の一部で自給自足生活をしていた村落の状況を反映している。徴税方法などの地方統治の近代化の過程に苦しむ農民は、盗賊行為を自衛の手段とみることもあった。

「牛泥棒とノーラの舞ができること」とは「牛泥棒ができるほどの能力をもち、ノーラの舞で呪術的能力を示すことができるほどの人徳と副収入を得られる男が婿として賞賛される」価値観を表

す。「牛泥棒」が日常的に必要な盗賊としての資質で、収入を得る能力であるとすれば、「ノーラの舞」は副収入の手段であると同時に、呪術的能力の高い「魂」の強さを評価するものでもある。

この価値観は「不死身、あるいは強いお守りや呪術をもった人物」が警察や役人の追手から逃げおおせることで民衆の英雄とみなされる伝説をも生んだ。

この価値観の理解の背景には、この地域の社会経済的状況だけではなく、パタルンの古いバラモン信仰による呪術がナコンシータマラートやパタルンのソクラー湖流域に広まり、クダーにはその地域からの戦争難民や移住民であるタイ語話者によって持ち込まれたと考えられ、生き残っていたと見られるだろう。

参考文献

- Cheah Boon Kheng, 1988. *The Peasant Robbers of Kedah 1900-1929: Historical and Folk Perceptions*, Oxford Univ. Press., Singapore.
- Ghulam-Sarwar Yousof, 1982. "Nora Chatri in Kedah: A Preliminary Report", *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society*, 55, No. 1 (242), pp. 53-61
- Guelden Marlane, 2018. *Dancing for the Gods: The Nora Bird Dance of Southern Thailand* Vol. 1, White Lotus, Bangkok.
- 黒田景子, 1995. 「サムサムとシャム人; ケダーにおける Thai-speaker 小史」『南方文化』22, 天理南方文化研究会, 44-61.
- _____, 2002. 「南タイ, ソクラーのサムロン橋碑文について」『上智アジア学』, 上智大学アジア文化研究所. 20, 93-110.
- _____, 2012. 「パタニの二つの顔」『東南アジアのイスラーム』第6章, 東京外国語大学出版, 145-170.
- _____, 2019-a. 「1911年英領マラヤ下センサスにおけるクダー (Kedah) 像」『鹿大史学』66, 19-36.
- _____, 2019-b. 「ムソビシの時代: 1821-1842年のシャムによるクダー占領期 part.1」『鹿児島大学総合教育機構紀要』3, 27-40.
- _____, 2019-c. 「コタムンクアンのシャリフ・アブ・バカル・シャー伝承と『シャム語』話者たち: クダー史の再検討」『南方文化』45, 43-78.
- _____, 2020-a. 「シェイク・ダウドとポンドック (ポノ) の役割: マレー半島中部におけるイスラームの「越境する」学術ネットワーク」, 『宗教研究』94-2, 109-135.
- _____, 2020-b. 「ムソビシの時代: 1821-1842年のシャムによるクダー占領期 part.2」『鹿児島大学総合教育機構紀要』4, 27-46.
- Kuroda Keiko, 2021. "Folk Dance-Dramas as Hybrid Culture in the Thai-Malay Border Region; Nora, Makyung, and Mek Melung" *The Journal of Intercultural Studies of Kansai University of Foreign Studies*, vol. 42, Intercultural Research Institute.
- Mana Khunweechuay, 2003. *The Peasant Robbers of Songkhla Lake Basin, A.D. 1894-1922*, (原文タイ語), ISBN 974-464-377-3. ISBN 974-464-377-3, M.A. Thesis, Silpakorn University, 2003.
- 永井 史男 (1996) 「5世王の初期改革 (1873 - 74年) をめぐる一考察」『重点領域研究総合的地域研究成果

告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて』, 11: 112-120

西井 涼子, 2012. 「南タイの暴力事件にみるムスリム－仏教徒関係－東海岸と西海岸の比較から」『東南アジアのイスラーム』第5章, 123-144.

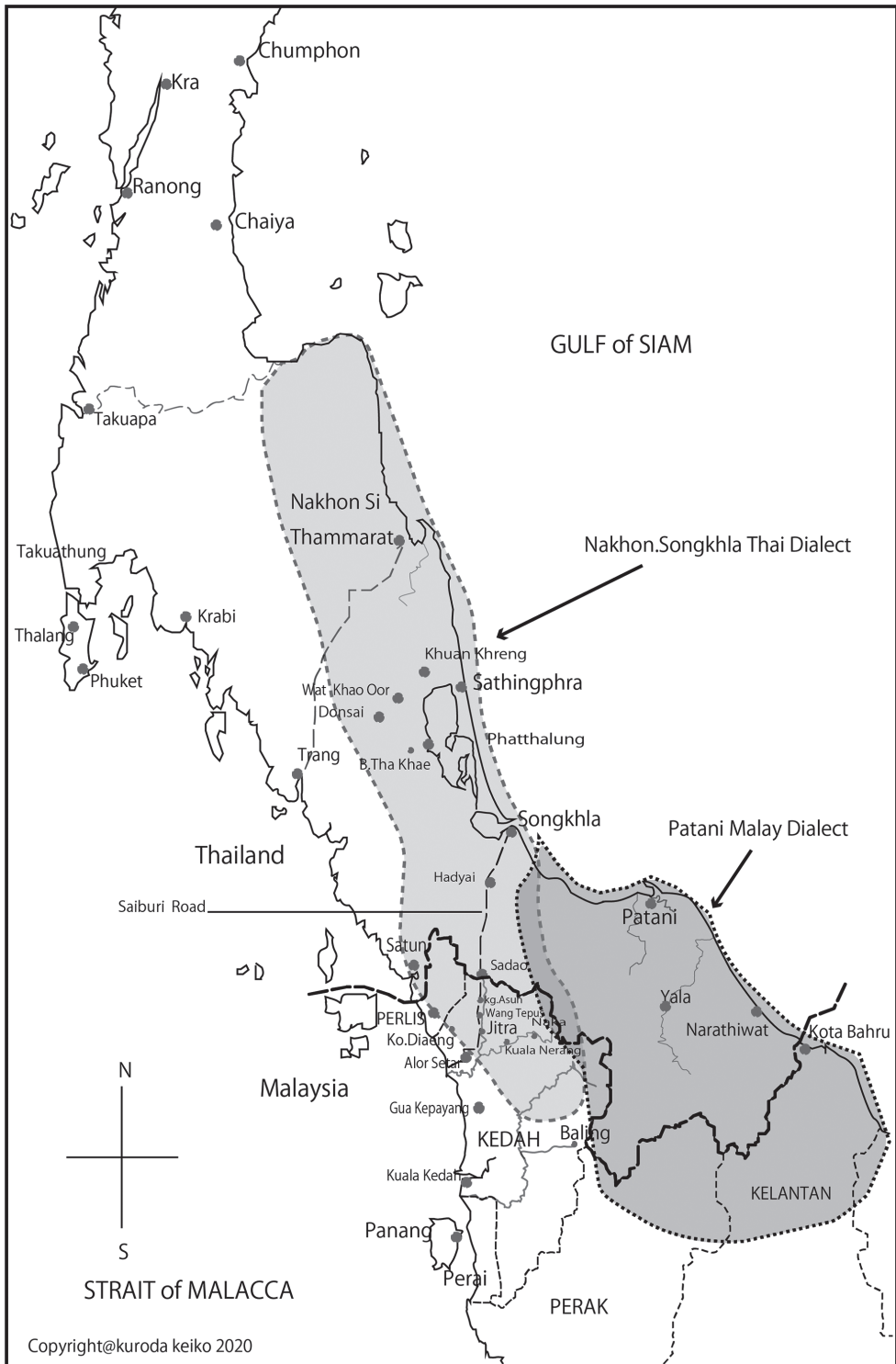
Nithi Eawsriwong 2000. "Khon Thai" (原文タイ語) 「南部の人々」, 『マティヨン週末版』 20-Oct.

Phrabat Somdet phramongkut Caoyuu hua, 1963. *Cotmai het Praphathuamuang PakTai Ro.So. 128*, (タイ語) 『ラーマ6世南部行幸録, 1909年』 Bangkok, Suksa Phan phanit

Suthiwong Phonphaibun, 1999. "Saranukrom Watthanatham PakTai vol,2 (タイ語) 『南タイ文化事典第2巻』.

Suthiwong Phonphaibun, 1999. "Saranukrom Watthanatham PakTai vol,8 (タイ語) 『南タイ文化事典第8巻』

附記 なお、本稿は東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所のAA研共同利用・共同研究課題プロジェクトである「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究－トランスナショナルなネットワークと現地の応答」(代表 富沢寿勇 2020-2022)と「東南アジア大陸部におけるイスラーム受容と社会関係の歴史像構築のための基盤研究」(課題番号-20H01325) 研究期間 2020-04-01 ~ 2024-03-31, (代表池田一人) 科学研究費助成基盤研究 (B) による研究成果の一部である。



Map. マレー半島中部の南タイ語ナコンシータマラート、ソクラー方言、パタニ・マレー語の分布